

# 「ソーシャル」を考えるための10冊



「社会」を対象にした学問の古典から、情報ネットワークに支えられた今日の「ソーシャル」な空間とそこで営まれる生活、さらに創作まで。今後も変容を続けるであろう「ソーシャル」について、今のうちに読んでおきたい書籍を選びました。



Number 1

**影響力の武器 [第二版]**  
なぜ、人は動かされるのか

ロバート・B・チャルディーニ著  
社会行動研究会訳  
誠信書房/2007年

人は、社会に属す以上、人から影響を受けずにはいられない。セールストークに乗って勧められるがままに物を買ったり、怪しげな団体の寄付に応じてしまったり……。消費者心理のからくりや、人間の不可思議な社会的行動についての丹念な調査・研究がまとめられた一冊。人といふ信頼関係を築くうえで参考となる。

Number 2

**空白を満たしなさい**

平野啓一郎著  
講談社/2012年

死んだ人間が蘇る「復生(ふくせい)」現象に揺るがされる世界。復生者である主人公は、自分が自殺した理由を追求しはじめる。果たして社会は復生者を受け入れることができるのか。人間はさまざまな人格を内包しているという「分人」概念を駆使し、社会のなかで人が幸福に生きるためには、という普遍的なテーマを突き詰めた傑作小説。

Number 3

**「社会的うつ病」の治し方**  
人間関係をどう見直すか

斎藤 環著  
新潮選書/2011年

近年増加している、怠けや甘えと誤解されがちな新型うつ病を、筆者は「社会的うつ病」と名付ける。なぜなら、その治療には、休養や薬物療法だけではなく、人間関係の積極的な活用や適度な活動、すなわち「社会参加」が重要だからだ。自己肯定できる人間関係＝「人業(ひとぐすり)」の重要性を説き、現在のうつ病治療に一石を投じた論考。

Number 4

**社会的排除**  
参加の欠如不確かな帰属

岩田正美著  
有斐閣Insight/2008年

ホームレスやワーキングプア、ネットカフェ難民、日雇い派遣、孤独死や自殺……。福祉の制度からこぼれ、苦しむ人々の姿は、まさに「人ごと」ではない。社会的排除が“今そこにある危機”として明確に立ち現れている日本で、目指されるべき社会的包摂のあり方を、社会参加と帰属にフォーカスしつつ探る。心に突き刺さる一冊。

Number 5

**ウェブ社会のゆくえ**  
多分化した現実のなかで

鈴木謙介著  
NHKブックス/2013年

場所性、人と人との間の距離、社会での個々人の役割——今、ますます多義的になっている「空間」をテーマに、ウェブ社会の来し方行く末を占う。リアル空間にウェブの情報空間が混入し、分断されて「孔(あな)」だらけになった現実をどう生きる。分断を束ね、共同性を復活させることは可能か。ここにもまた、震災後に考えるべき問いがある。

Number 6

**FABに何が可能か**  
「つくりながら生きる」21世紀の野生の思考

田中浩也・門田和雄編著  
フィルムアート社/2013年

近年、各種工作機械を揃えた市民工房「FabLab(ファブラボ)」の登場で、個人単位でのものづくりがブームとなり、インターネット経由で製作データ等を共有することで、国境さえも越える小さなものづくりのネットワークも構築されているという。「ものづくりとつながり」が社会を変え、大きな可能性を秘めていることに気づかされる。

Number 7

**ソーシャルデザイン**  
社会をつくるグッドアイデア集

グリーンズ編  
朝日出版社/2012年

社会のあたりまえの問題を「自分ごと」として解決に導く、社会貢献の新しい形・ソーシャルデザイン。ものやサービスの作り手、使い手、両者をつなぐ人や企業、三者にプラスがあるのがその魅力だ。地域おこしや農業の後継者探し、震災からの復興などの具体例から、新しい「つながり」を手にした人々の笑顔が伝わってくるようだ。

Number 8

**動員の革命**  
ソーシャルメディアは何を変えたのか

津田大介著  
中公新書ラクレ/2012年

ネット・ジャーナリズム界の寵児が、現在のソーシャルメディアの最新線を紹介。そもそもソーシャルメディアとは？という定義から、SNSが革命の発端となった「アラブの春」、ビジネスやまちおこしなどの場面のソーシャルメディアの活用しかた、震災時のソーシャルメディアの有用性など、具体的な例や提言が満載である。

Number 9

**人間の安全保障**

アマルティア・セン著  
東郷えりか訳  
集英社新書/2006年

1990年代半ばから「人間の安全保障」という概念が国際社会において議論されはじめた。これは、環境破壊、紛争、人権侵害、貧困などあらゆる種類の脅威から人間の生活・生存・尊厳を守り、持続可能な個人の自立と社会づくりを促すという、新しい安全保障の概念であり、地球規模で取り組むべき課題である。

Number 10

**社会学の根本概念**

マックス・ヴェーバー著  
清水幾太郎訳  
岩波文庫/1972年

ソシヤルの根本概念に立ち返るとき、そこにヴェーバーがある。一般化された用語で置き換える前の「社会学」が宿していた諸相を、徹底的に腑分け。宗教、経済、政治、法律などの各領域で社会学的研究を成し遂げたヴェーバーならではの網羅的な考察が、微に入り細を穿って論じられる様は、圧巻だ。